



Title	須恵器子持器台に関する小考：ミニチュア炊飯具副葬古墳との関係を中心に
Author(s)	岩越，陽平
Citation	待兼山考古学論集. 2025, 4, p. 553-563
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105070
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

須恵器子持器台に関する小考

—ミニチュア炊飯具副葬古墳との関係を中心に—

岩 越 陽 平

はじめに

後期古墳から出土する土器のうち、その特異な形態により早くから注目されてきたものとして、複数の子器や人形・動物などの小像を付けることを特徴とする「装飾付須恵器」がある。

装飾付須恵器の出土事例は、全国的に装飾付須恵器を扱った柴垣勇夫（柴垣 1984）や山田邦和（山田 1998）などの集成以後も増加し、現在では 600 前後の遺跡で 700 点に迫ると思われる。古墳時代中期の須恵器生産開始期から形を変えつつ継続し、一部は奈良時代にも残存するが、古墳時代後期（6 世紀）において最も盛行した器種群であるといえる。

本稿ではその中でも 6 世紀に出現する子持器台に焦点を当てて、大阪府南部を中心に一定の偏りを示す分布状況などから、その流通や副葬の背景について若干の検討を行いたい。

1. ミニチュア炊飯具の副葬古墳と子持器台

子持器台が偏って認められる特定の分布状況とは、いわゆるミニチュア炊飯具と呼ばれる、渡来系集団との関係が深いと考えられてきた土器と、須恵器子持器台あるいはそれを模倣した可能性のある土師器子持器台が共に横穴式石室あるいは横穴墓から出土することである。このような現象が中・南河内地域を中心に 6 世紀代に一定程度認められる。

ミニチュア炊飯具に関しては、朝鮮半島より導入された炊飯具を祖形に、漢人系を自称する渡来人が故地（中国）で行われていた炊飯具形明器の副葬習俗を復活させたと解釈とする水野正好の説を基礎として（水野 1969）、多くの研究が重ねられてきた。また、釵子の副葬とも合わせて 5 世紀末～6 世紀の中国系渡来人・遺物の大和・河内地域への流入の流れの中でミニチュア炊飯具を捉えた関川尚功の研究も重要である（関川 1988）。また、近年では韓半島において漢城期の百済地域の河南省甘一洞古墳群でミニチュア炊飯具が少数ながら確認された事例を受けて、中国南朝—百済—倭という系譜での理解が進みつつある（中久保 2018、寺前 2022 など）。

さて、そのミニチュア炊飯具の副葬古墳において、須恵器あるいは土師質の子持器台が伴うという現象について、富山直人が種々の渡来系遺物の集成を行う中で若干の指摘を行って

いた（富山 2008）。また、筆者も大阪府河南町・太子町一須賀古墳群の検討を行う中でそれを追認しつつ、6 世紀後半に顕在化した群集墳における器種選択の一つの個性と捉えた（岩越 2021）。その後、島崎久恵が大阪府南部の群集墳を中心に、その事例をより詳細に検討した（島崎 2021）。このようにミニチュア炊飯具と子持器台の副葬の相関関係には、一定の注目が集まったが、その意味するところについては未だ明らかでない。本稿ではそれらの事例を再検討しつつ、その意味や須恵器子持器台という器種自体の性格について考えてみたい。

なお、今回の検討でいう子持器台とは、山田邦和（山田 1998）の分類では「子持器台 I－2 類」もしくは「I－3 類」にあたるもので、親器の形態は通常の須恵器の器種にみられる高杯形器台とは若干形態が異なる。多くは須恵器杯の形をした子器を口縁部に配し、さらに中央にも高杯や壺などを配することがある（図 2－1・5・8・9・11 など）。「I－1 類」とされる、須恵器高杯形器台に類似した形態の親器に子器をつける器種は、今回扱う中では偶然出土例がないだけかもしれないが、「I－1 類」に比べて、「I－2・3 類」は器高が低いものが多い。また、「配像高杯形器台」に分類される、小像を配する器種も今回検討する古墳では出土していない⁽¹⁾。

一方、土師器子持器台とするものは、脚部の上に比較的扁平、あるいは浅い皿形を呈する円盤などを載せ、その上に小型の器を複数配するものである（図 2－2・7）。須恵器子持器台との形態的類似性から、それを模倣して製作された可能性が考えられよう。また、一須賀古墳群や飛鳥千塚古墳群において須恵器子持器台と共伴する出土傾向や、この地域での須恵器模倣の土師器の出土例の多さなどからも、須恵器子持器台との一定の関連性が認められる。

事例の検討 ミニチュア炊飯具副葬古墳に子持器台が伴う事例を中心に、図 1・表 1 にまとめた。ミニチュア炊飯具の出土例は近年の集成（合田 2019）では 139 例、うち奈良 33 例、大阪

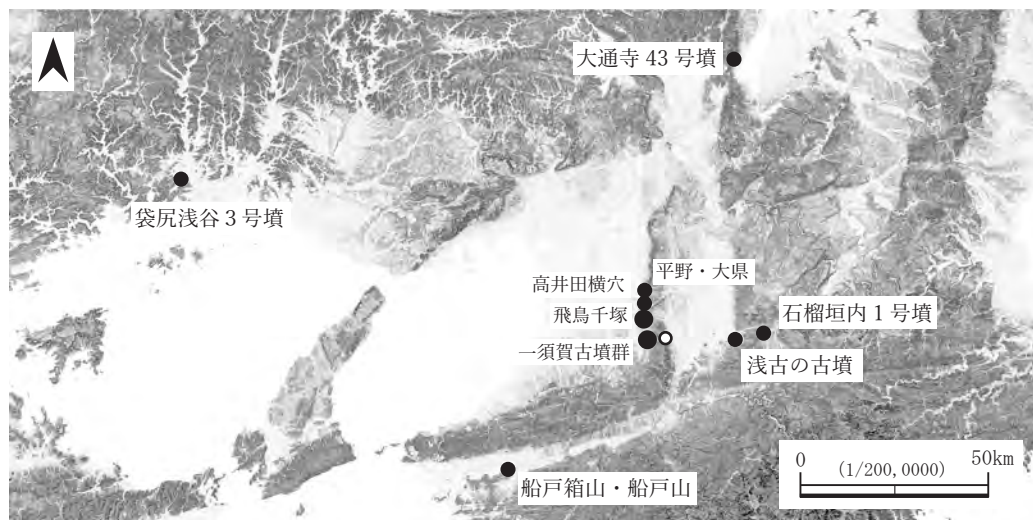


図 1 関連遺跡分布図

表1 ミニチュア炊飯具と子持器台の共伴古墳ほか関連遺跡

古墳名	墳形・ 規模 (m)	築造時期 (須恵器型式)	子持器台 の分類 (山田1998)	須恵器 子持器台	土師器 子持器台	ミニチュア 炊飯具	その他遺物
一 須 賀 古 墳 群	A9号墳	円・約20	TK209	I-3			
	B4号墳 (旧・B2)		TK43	I-3			
	B14号墳 (旧・B8)	円・約13	TK10	I-3			
	L3号墳	円・約14	TK209	I-3			
	L4号墳	円・約18	TK209	I-3			
	WA6号墳	円・約15	TK43	I-3			
	WA12号墳	円・約22	TK43	I-3			子持台付壺
	WA17号墳	円・約12	TK10新～TK43	I-3			
	WA21号墳	円	TK10新	I-3			韓式系土器
	WA27号墳	円	TK10新～TK43	子器のみ			韓式系土器・子持台付壺
飛 鳥 千 塚 古 墳 群	切戸1号墳	円・約12	TK10新～TK43				土師器子持台付壺
	切戸2号墳	円・約14	TK43～TK209				
	奉献塔山1号墳		TK43～TK209	I-3			釵子・金銅製沓・子持台付壺子器
	奉献塔山2号墳		TK43～TK209	子器のみ			
	大谷2号墳	円・約20	TK209	子器のみ			
	キレト2号墳 (五十村古墳群)	円・10 ～20	TK43?				
	平尾山古墳群		TK10	I-2			釵子・指輪
	平野・大泉10支群1号墳						
	高井田横穴第4支群 42号墳 (旧C号墳)	横穴墓	TK10新	子器のみ			
	高井田横穴第3支群 2号墳 (唐草の窟)	横穴墓	TK10新～TK43	I-2			
御所市出土地詳細不詳							
浅古の一古墳	詳細不明	MT15～TK10古	I-2				
石榴垣内1号墳	円・約10	TK43	I-2				釵子・指輪
袋尻浅谷3号墳	円・約16	TK43					平底瓶
船戸箱山古墳 (5号石室)	方・28× 20	TK10	I-2				装飾付台付壺 (子器・小像)
大通寺43号墳	円・約16	TK209					釵子 (小片)

24例、滋賀74例、兵庫6例、和歌山3例、三重2例、岐阜1例を数える。そのうち、一つの石室または横穴墓の中でミニチュア炊飯具と子持器台が伴う事例は13例と、全体の中では約10%に相当する。さらに河内地域に限定すれば、約40%という高い割合になる。

一須賀古墳群を中心に、羽曳野市飛鳥千塚古墳群、柏原市平尾山古墳群等、中・南河内の群集墳での事例は先述のように島崎によって整理されている（島崎2021）。一須賀古墳群の子持器台については、山田邦和の分類でI-3類とされる鉢部の深いタイプがまとまるという指摘があり（柴垣1984、山田1998）、その点も須恵器の生産や流通との関係が興味深い。

ここで一つ付け加えるならば、奉献塔山1号墳での須恵器子持台付壺（図2-6）、切戸1号墳での土師器子持台付壺（図2-4）、一須賀WA-12号墳・WA-27号墳での須恵器子持台付壺（図2-3）の出土例についても、子持器台と同じく多数の子器をもつ器種という点で、子持器台の代替または同等のものとして扱われた可能性を想定ができるかもしれない⁽²⁾。

続いて、島崎が検討した大阪府の事例以外に奈良県・兵庫県・滋賀県での事例を確認していく。必ずしもミニチュア炊飯具と子持器台が同一古墳から出土する事例だけでなく、周辺の遺跡を含めた出土傾向や、釵子と子持器台が出土する事例も含めて考えてみたい。

浅古の一古墳 桜井市浅古の山裾に位置する古墳であり、1963年に不時発見された。発見時には相当に破壊された状況であったという。南に開口する横穴式石室を主体部にもつ小型の古墳で、計7基の子器を有する須恵器子持器台（図2-8）と、ミニチュアの甕形土器を含む土器類が石室から出土した。ほかに、金銅装のf字形鏡板、剣菱形杏葉、鉄製輪鏝などの馬具、鉄釘等も出土している。出土した須恵器高杯等からみて、今回検討する事例の中では最も古く、須恵器編年のMT15～TK10型式期に位置づけられる。

石榴垣内1号墳 宇陀市榛原笠間（旧・宇陀郡榛原町）に所在する。古墳～奈良時代、さらには中世の集落遺跡である石榴垣内遺跡の西方で、2基の古墳が確認された。そのうち1号墳は墳丘の盛土は大半が失われていたが、約10mの円墳と推定されている。石室は右片袖で、鉄釘を用いた木棺の痕跡も確認された。須恵器子持器台（図2-9）を含む土器類が奥壁側から出土した。また、ミニチュア炊飯具は出土していないが、棺内にあたる位置から釵子が出土した。

葛城山・金剛山東麓の事例 奈良県内では、葛城市・御所市の葛城山東麓の地域も、子持器台のまとまる地域である。山田邦和の集成（山田1998）を参考にすると、須恵器子持器台として京都大学所蔵の新庄町（現・葛城市）山口採集資料のほか、新庄町寺口、新庄町山口千塚の採集資料、さらに橿原考古学研究所所蔵の笛吹20号墳の資料の4例が挙げられる。さらに、これも出土地詳細不詳の資料だが、御所市内出土として、高17.6cm、径33.7cmを測り、9個の子器をもつ土師器の子持器台がある（図2-10：橿研博『大和考古資料目録』Iより）。これらの資料は、葛城山・金剛山東麓の群集墳から出土したものと推定される。

また、葛城山・金剛山の東麓の地域は、ミニチュア炊飯具や釵子も多く出土する地域であり、その関連性がうかがえる。それ以外にミニチュア農具や、鉄滓の副葬なども注目できる。

袋尻浅谷3号墳 たつの市揖保川町袋尻に所在する円墳で、横穴式石室からミニチュア炊飯具のセットと、土師器子持器台が出土している。出土遺物から複数回の追葬が想定されている。報告では中国系の「脚付案」とされた土師器子持器台は、中央に1個、周辺に7個の子器を配する。また、この古墳からは百濟系ともされる須恵器平底瓶も出土している。

大通寺43号墳 6世紀末頃の古墳で、石室はかなりの攪乱を受けていたが、組合形の器台と言われる特殊な土師質の土器やミニチュア炊飯具の甕などが出土した。大津市山麓の群集墳はミニチュア炊飯具の最も多い地域であるが、子持器台が伴うのはこの事例のみである。

船戸箱山古墳・船戸山古墳群 岩出市船戸において近接して分布する船戸箱山古墳と船戸山古墳群の関係も注目できる。船戸山3・6号墳では、和歌山県で出土例が3例と限られるうちのミニチュア炊飯具が2例出土している。それに隣接する船戸箱山古墳は、墳丘内に複数の主体

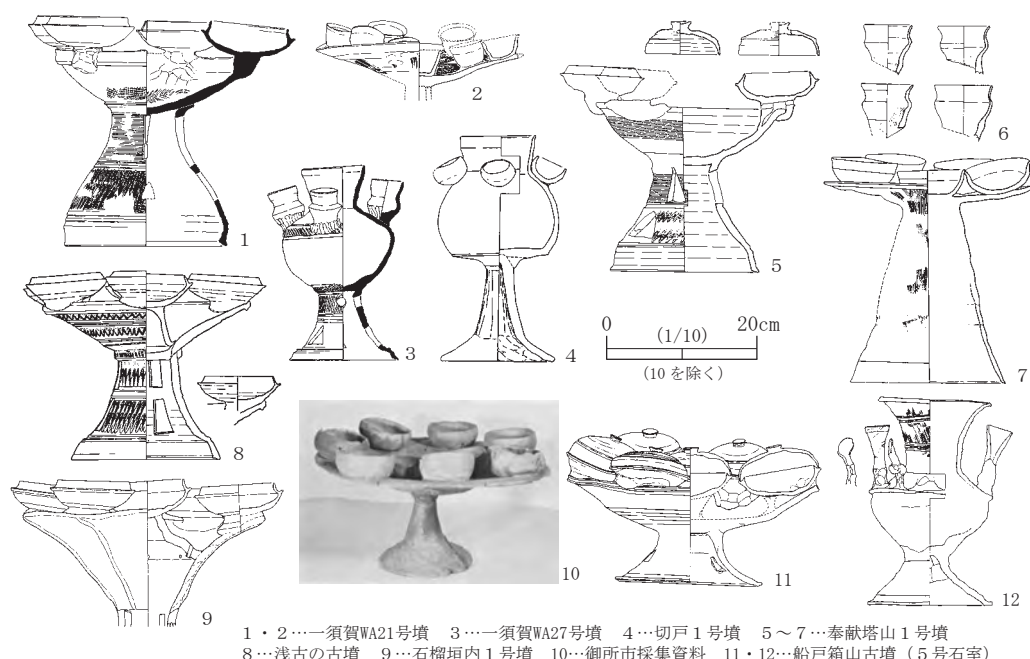


図2 関連資料（須恵器および土師器子持器台・裝飾付台壺）

部が確認される特異な方墳であるが、第5石室の羨道部から須恵器子持器台や小像・子器を有する須恵器裝飾付台付壺が出土している（図2－11・12）。

小 結 これらをまとめると中・南河内の群集墳や奈良盆地南部を中心に、ミニチュア炊飯具の副葬、子持器台の副葬、さらに子持器台や子持台付壺などを含めた須恵器模倣土師器の副葬⁽³⁾という、3つの現象が重なり合って存在していたことが判る。これらはそれぞれ単独でも認められる現象なので、それらが相互に関連する現象なのか、別々の事象が重なり合って存在しているだけなのかの評価は難しい。ただし、ミニチュア炊飯具に須恵器・土師器子持器台の伴う事例が、遠く離れた袋尻浅谷3号墳や、船戸箱山古墳・船戸山古墳群、大通寺古墳群へ広がっていることも含めて考えると、6世紀後半にはミニチュア炊飯具副葬の流行と合わせて、それらの現象が緩やかに共有される規範となっていたとみることができる。兵庫県のミニチュア竈について、河内からの伝播を指摘する見解とも整合的である（合田2019など）。

なお、今回取り上げた事例について、ミニチュア炊飯具と子持器台が厳密に同じ埋葬に伴うものであるのか、また出土位置等の検討も重要であるが、残念ながら石室内が攪乱を受けていたり、追葬等による二次的な移動などもあり、原位置が判然としないものが多い。また、ミニチュア炊飯具と子持器台それぞれに細かな時期比定が難しいことから、検討が及ばなかった。

2. 子持器台の性格に関する若干の検討

前節で指摘したような諸現象はそれぞれに重要なものであるが、今回検討が及ばなかった点も多い。ここでは、河内・大和を中心として、ミニチュア炊飯具を副葬する渡来系の古墳で、子持器台が好んで選択されたという点に着目して考えてみたい。

韓半島の事例との関連 ミニチュア炊飯具の存在から渡来系の被葬者が推定される古墳に子持器台が副葬されることにどんな意味があったのかを考えるために、韓半島での子持土器の出土例を確認してみる⁽⁴⁾（表2・3、図3）。韓半島では、子器を有する陶質土器は「燈盞形土器」と呼ばれる灯明具の一種とも考えられており、嶺南地方の加耶・新羅圏に多く、倭系遺物等がみられる栄山江流域の古墳や遺跡でもいくつかの出土例がある（李 2021）。また、富山直人は子持器台と、韓半島で盤に多数の杯を入れる事例との関連を指摘したが（富山 2008）、そういった事例も筆者の把握する限り、慶州の王陵である皇南大塚古墳など嶺南地方の事例である。

先に述べたように、近年では漢城期の百済地域でも、ミニチュア炊飯具が少数ながら確認されるようになったが、百済地域では本稿で検討しているような子持器台は確認されていない。今後、百済地域の中で子持器台に類似した土器の副葬事例が見つければ、ミニチュア炊飯具に子持器台が伴う日本の事例も、百済由来のものとする余地が出てくるかもしれない。しかし、現状ではそのような事例が無い以上、ミニチュア炊飯具と子持器台の相関関係は日本の中で生まれたものと理解しておいたほうが良いだろう。

なお、荒唐無稽な話かもしれないが、ミニチュア炊飯具の淵源をさらに辿って、中国の事例を考えてみると、明器の竈なども副葬される漢代以降の墓に、仮器として副葬された陶製の案や盤などの上に耳杯などの多数の器を並べた供献の状況が確認できる⁽⁵⁾（戸原 1991 など）。また、中国では、台上に食器を並べる食事形態も早くから普及したと考えられる。そういった多数の器を並べた供献の状況が、中国系を自称した渡来人によって、明器の竈を副葬する風習の再現とともに子持器台によって再現された考えるのは、論理の飛躍が過ぎるであろうか⁽⁶⁾。

さて、話を韓半島との関係に戻すと、装飾付須恵器を韓半島の陶質土器と関連づけようとしたものとして近藤広の検討などがあり（近藤 1992）、それについては山田邦和の批判がある（山田 1998）。山田の指摘するように、装飾付須恵器を韓半島の子持土器・装飾土器と結びつけることには慎重でなければならないし、筆者もここで日本の6世紀に出現する子持器台が、韓半島の近い時期の資料に直接的にルーツを辿れると主張したいわけではない。ただし、須恵器の生産自体が韓半島から伝来したものであることから、韓半島の装飾土器事例を確認することで参考になる点もあると思われる。それは例えば、日本の装飾付須恵器では、一つの個体で子器と小像が複合することが認められる一方、筆者の把握する限り韓半島では無いということや、

表 2 韓半島嶺南地方の子持器台形・子持高杯土器

出土地	遺跡名（所蔵機関）	子器数	器高 (子器含む)	時期	参考文献（韓国語文献は筆者日本語訳）
慶尚北道亀尾市	洛山里古墳群 38号墳西柵	5		5世紀前半	暁星女子大学校博物館・善山郡 1990『洛山洞月波亭 山古墳群発掘調査概報』
慶尚北道亀尾市	洛山里古墳群 同上	5?		5世紀前半	同上
慶尚北道慶州市	金鈴塚古墳 主体部	5		6世紀初頭	朝鮮総督府 1932『大正13年度 古蹟調査報告』
慶尚北道慶州市	金鈴塚古墳 主体部	5		6世紀初頭	朝鮮総督府 1932『大正13年度 古蹟調査報告』
慶尚北道慶州市	徳泉里古墳群 1号積石木柵墳副柵	4	16.6cm	6世紀初頭	中央文化財研究院 2005『慶州徳泉里古墳』発掘調査 報告 第73冊
慶尚北道慶州市	徳泉里古墳群 同上	5	13.5cm	6世紀初頭	同上
慶尚北道慶州市	徳泉里古墳群 同上	6	14.9cm	6世紀初頭	同上
慶尚北道慶州市	月山里遺跡 A-68号周溝	6	24.0～25.0	5世紀前半	国立慶州文化財研究所 2003『月山里遺跡』
慶尚南道昌寧郡	校洞・松峴洞62号墳 主体部	6	13.9cm	5世紀末	国立加耶文化財研究所 2022『昌寧校洞39号墳および 周辺古墳Ⅱ—38号墳・62号墳ほか—』
慶尚南道梁山郡 東面法基里563	東亜大学校博物館	4	18cm	5世紀前半	文化広報部・文化財管理局 1989『重要発見埋蔵文化 財図録』第2輯
釜山広域市	福泉洞古墳群1号墳 主体部	4	12.8cm	5世紀前半	東亜大学校博物館 1971『東萊福泉洞第一號墳発掘調 査報告』1970年度古蹟調査報告
釜山広域市	福泉洞古墳群39号墳 副柵	6 +中央	15.8cm	5世紀前半	釜山大学校博物館 1989『東萊福泉洞古墳群第2次調 査概報』
釜山広域市	福泉洞古墳群53号墳 主体部	4	11.8cm	5世紀前半	釜山直轄市立博物館 1992『東萊福泉洞古墳群53號 墳』釜山直轄市立博物館遺蹟調査報告 第6冊
慶尚南道金海市	陵洞遺跡 ナ-6号墓	5	19.5cm	5世紀前半	蔚山大学校博物館 2012『金海陵洞遺跡Ⅱ—石柵墓』 蔚山大学校博物館学術研究叢書 第17輯
慶尚南道咸安郡	末伊山古墳群25号墳	7	16.9cm	6世紀初頭	咸安郡・ウリ文化財研究院 2018『咸安 末伊山古墳群 第25・26号墳』学術調査報告96冊
伝・慶尚道出土	国立慶州博物館所蔵	5	18cm		国立民俗博物館 1996『火の民俗』
伝・慶州出土		4	不明		国立慶州博物館 1974『陳列品図録』
伝・慶尚北道 慶州出土		3		5世紀前半	朝鮮総督府 1932『大正13年度 古蹟調査報告』
伝・慶尚南道 蔚山郡出土		6		5世紀後半	朝鮮総督府 1932『大正13年度 古蹟調査報告』
伝・宜寧出土		5			李員昌 1970「伽耶地域土器の研究—洛東江流域出土 土器の様相を中心として」『朝鮮考古学年報』東出版
伝・玄風出土		5			同上

※表2・表3は出土地未詳の資料を除く。

表 3 韓半島嶺南地方の子持台付壺形土器

出土地	遺跡名（所蔵者名）	子器数	器高 (子器含む)	時期	参考文献
慶尚南道陝川郡	玉田古墳群26号墳	8	57.1cm	5世紀代?	慶尚大学校博物館 1988『陝川玉田古墳群 Ⅰ 木柵墓』
慶尚南道咸安郡	道項里古墳群39号墳	4	9.4cm	5世紀後半	国立加耶文化財研究所『道項里古墳群Ⅱ』
慶尚南道咸安郡	道項里古墳群39号墳	4	9.8cm	5世紀後半	国立加耶文化財研究所『道項里古墳群Ⅱ』
伝・慶尚南道咸安郡	金陶菴氏所蔵	4	17.5cm		釜山市立博物館 1979『釜山市立博物館開 館展図録』

日本の装飾付須恵器に比べて、韓半島の子持土器は器高 20 cm以下と非常に小型のものが多く点である。ここで話を日本の子持器台に戻すと、先に述べた通り子持器台の中では、器高が低く、子器をつけるが小像をつけないタイプ（山田分類のⅠ－2類・3類）と、器高が高く、小像をつけるタイプ（配像高杯形器台）が比較的明瞭に区別できる可能性がある。今回検討した、ミニチュア炊飯具副葬古墳に子持器台・子持台付壺が伴う事例の中では、船戸箱山古墳で子持

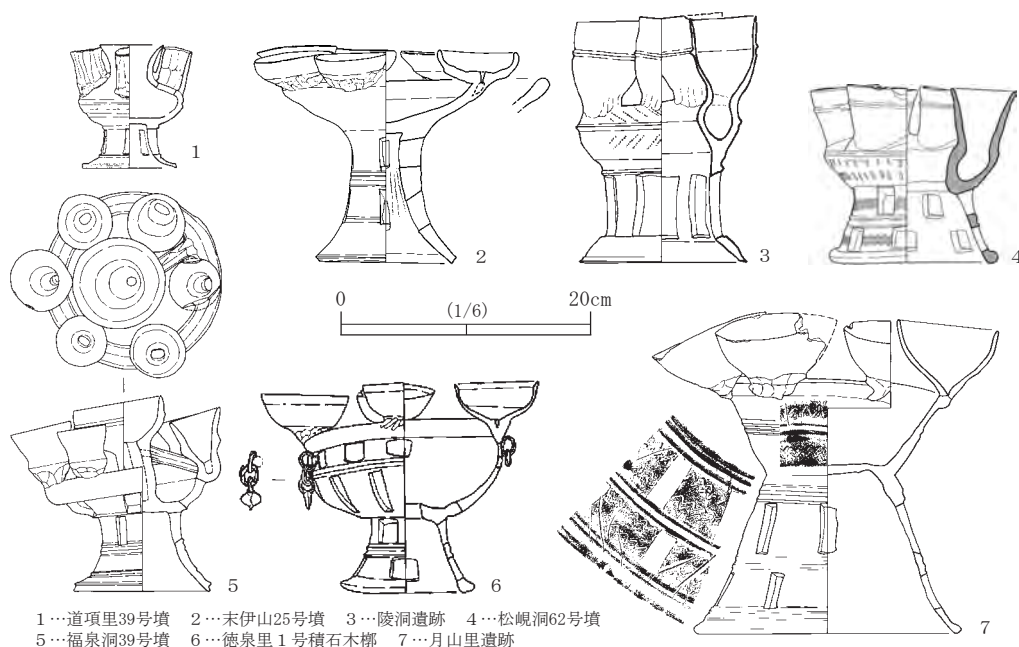


図3 韓半島嶺南地方の子持土器

器台に加えて小像を配する須恵器台付壺が出土しているほかは、小像をつけないタイプであった。このような点を積極的に評価するならば、そういった小像をもたないというこだわりこそが、渡来系集団という被葬者または葬送儀礼参加者の性格を反映したものであるということも考えられよう。小像を有する装飾付須恵器を中心に検討した間壁芳子は、岡山県など特定の地域で、人形・動物の小像を付けた装飾付須恵器が流行することについて、新羅系の渡来人との関係を考えたが（間壁 2009）、反対に、今回検討したような状況では、小像をもたないということにも一定の意味を見出せるのではないだろうか。もちろん使用者が子器や小像の意味を区別していたとは限らないため、子器・小像の有無のみで渡来系の性格を読み取るのは軽率であるが、場合によっては有効な視点であろう。

また最後に、子持器台を副葬する古墳の階層性についても若干触れておきたい。岸本雅敏の検討は、装飾付須恵器の発展過程や、社会階層との関連を論じたものとして重要であるが（岸本 1975）、装飾付須恵器の中でも器種によって古墳の階層性との関係が若干異なっていた可能性がある。山田邦和の集成を参考にすると、近畿地方では、前方後円墳から子持器台が出土する事例は奈良県三郷町勢野茶臼山古墳や平群町烏土塚古墳などを含む約2割で、物集女車塚古墳のような山城南部の古墳や井辺八幡山古墳等では配像高杯形器台もあるが、大多数の前方後円墳で用いられたのは子持器台ではなく装飾付台付壺である。このような点からみると、子持器台は、装飾付台付壺に比べて、やや低い階層の古墳を中心に用いられた傾向が指摘できる。

3. まとめにかえて

本稿では、須恵器子持器台を中心に、共通した系譜意識や交流をもつ集団同士の関係により、遠隔地で器種選択が共有される現象や、渡来系という被葬者の性格が子器・小像の有無という装飾付須恵器の器種選択に与えた可能性、階層性との関係などについて、若干の検討を行った。古墳に副葬される土器の組成について共通する規範の存在や、階層差、集団差等の指摘がなされてきた。もちろん装飾付須恵器においても、地域差等の検討は積み重ねられており、今回の検討では先学の業績を十分に踏まえられていないという危惧もあるが、ケーススタディーとして特定の事例を取り上げてみた。

また、横穴式石室や群集墳が盛行する6世紀の須恵器様式は、複数器種の大形化等によって特徴づけられるが、角杯などの特殊須恵器の出現や、栄山江との器形の共有関係（中久保2016）などから考えて、当時の対外的な関係にも一定の影響を受けた可能性は想像に固くない。横穴式石室という外来的な埋葬施設の本格的な導入にあたって、葬送儀礼に用いられる須恵器においても、韓半島からの直接的な影響や間接的な影響によって新たな器形が生み出されたという可能性も想定できよう。今回の場合では、装飾付須恵器のうち、ある器種に小像を付ける一方で、子持器台には付けないといった区別が、韓半島に源流をもつ須恵器工人の間で継承されていた知識や記憶等に基づく形でなされた可能性などを想定したい。

今回の検討は、子持器台という器種のいくつかの側面に関する触り程度の検討であるが、特定の器種がどのような集団に好まれたかといった視点からみることによって、装飾付須恵器という特異な器種群の中にもみられる、作り分けや各器種の創出の背景にも迫れないだろうか。小考がその実態に大きく迫るものとは言い難いが、今後も引き続いて検討を行いたい。

謝 辞

本稿をなすにあたり、下記の方々・機関にお世話になりました。

市川創 岩井顕彦 上田直弥 岸本道昭 木村理 小倉頌子 齊藤希 寺前直人 東藤隆浩
中久保辰夫 東影悠 久永雅宏 平井洸史 廣瀬時習 前田俊雄 森本徹 山田邦和
大阪府立近つ飛鳥博物館 たつの市教育委員会

付 記：このたび退官を迎えられる福永伸哉先生には、何かと歩みの遅い私を根気強く指導していただいたこと、感謝の意に堪えません。謝恩会の場で、現在の職場の中でもしっかりと存在感を示すようにと先生から頂いた言葉は今でも支えになっています。今後ともご指導ご鞭撻を賜ることができれば幸いです。

註

- (1) このほか、壺を子器とする「子持器台Ⅱ類」という分類もなされている（山田 1998）。
- (2) 装飾付台付壺のうち、子器を有するが小像を付けないタイプをここでは子持台付壺と呼びたい。
- (3) 群集墳等での須恵器模倣の土師器の出土については、南河内と奈良盆地の南西部で竹内街道を通じた共通性がうかがえ、奈良県では南は五條市南阿田大塚山古墳まで広がる可能性がある（岩越 2022）。なお前稿で、五條市犬飼大師塚古墳にも須恵器模倣の土師器無蓋高杯の存在を指摘したが、それは筆者による報告書記載内容の誤読であったことが判明した。資料を実見したところ、還元焰焼成された須恵器であることを確認したので、ここで訂正させて頂きたい。
- (4) 由良大和古代文化研究協会の『研究紀要』24（2020 年）に掲載された拙稿でも若干触れたが、論考という性格の文章では無かったので、ここでまとめ直すこととしたい。
- (5) 漢鏡編年などでよく知られる『洛陽焼溝漢墓』の報告書では陶灶（竈形明器）155 点に対して、案は 44 点出土している（戸原 1991）。
- (6) このほか、子器を有する遺物では、後漢代～西晋代にかけて五連罐・神亭壺と呼ばれる遺物が有名であるが、小像を多数付すように変化する点や、壺形態である点では子持器台とは異なる。

引用・参考文献

- 李相日（松永悦枝翻訳） 2021「三国時代における灯火器の種類と使用法」『古代の灯火—先史時代から近世にいたる灯明具に関する研究』奈良文化財研究所、奈良：pp. 27-40
- 岩越陽平 2021「器種構成からみた群集墳の須恵器副葬について」『群集墳研究の新視角』古代学研究会編 六一書房、東京：pp. 91-113
- 岩越陽平 2022「古墳出土土器にみる奈良盆地南西部と五條地域との関係について」『研究紀要』26 由良大和古代文化研究協会（米田敏幸ほか「吉野川流域古墳文化の研究」の一部）、奈良：pp. 20-30
- 岸本雅敏 1975「装飾付須恵器と首長墓」『考古学研究』第 22 巻第 1 号 考古学研究会、岡山：pp. 34-59
- 合田幸美 2019「小型炊飯具の分布と消長」『和の考古学—藤田和尊さん追悼論文集』ナベの会、奈良：pp. 269-280
- 近藤 広 1992「須恵器にみる三国時代陶質土器の影響」『突班』埋蔵文化財研究会、大阪：pp. 352-358
- 柴垣勇夫 1984「装飾付須恵器の器種と分布について」『愛知県陶磁資料館研究紀要』3 愛知県陶磁資料館、愛知：pp. 2-17
- 島崎久恵 2021「一須賀古墳群出土の子持器台について」『館報』25 大阪府立近つ飛鳥博物館、大阪：pp. 57-62
- 関川尚功 1988「古墳時代の渡来人」『橿原考古学研究所論集』第 9 吉川弘文館、東京：pp. 69-116
- 戸原和人 1991「案の系譜」『京都府埋蔵文化財論集』第 2 集 京都府埋蔵文化財調査研究センター、京都：pp. 73-78

- 寺前直人 2022「土器祭祀—横穴式石室にみられる二相の土器儀礼—」『季刊考古学』160 雄山閣、東京：pp. 65-69
- 富山直人 2008「横穴式石室出土の大陸系文物」『韓式系土器研究』X 韓式系土器研究会、大阪：pp. 95-106
- 中久保辰夫 2016「古墳時代後半期における土器研究の現状」『土器編年研究の現在と各時代の特質—須恵器生産の成立から終焉まで—』考古学研究会関西例会、大阪：pp. 1-40
- 中久保辰夫 2018「古墳時代の近畿地域における渡来人と土器」『考古学ジャーナル』711 ニューサイエンス社、東京：pp. 10-14
- 水野正好 1969「滋賀郡所在の漢人系帰化氏族とその墓制」『滋賀県文化財調査報告書』第4冊 滋賀県教育委員会、滋賀：pp. 77-92
- 間壁霞子 2009『生活意識の考古学』、兵庫
- 山田邦和 1998『須恵器生産の研究』学生社、東京

本稿には JSPS 課題番号：JP23K00940 の成果を含む。